
本当はもっと面白く恐ろしい世界の童話

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当はもつと面白く恐ろしい世界の童話

【Nコード】

N0786I

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

皆さんに馴染みの深い、様々な世界の童話や物語は、本当はもつと面白く、或いは恐ろしいのです。お分かりになると思いますが、全て作者が勝手な想像で捻じ曲げた嘘八百の内容ですので誤解の無いようによりしく願います。

第一話 星の銀貨 Die Sterntaler

昔むかし、とある村に小さな女の子が一人で住んでいました。お父さんとお母さんは病気で亡くなってしまい、家に住み続ける事も出来ず、とうとう持っている物は自分が着ている服と、パン一切れだけになってしまいました。凍える冬空の下へ追い出されてしまった少女は、しかし、神様を信じる心だけをもって、ひとりぼっちで当てもなく野原を歩いておりました。

と、前の前にみすばらしいなりの男がやってきました。お腹を空かしているらしく、少女の持っている一切れのパンを見ると、「お腹がすいて仕方がないんだ。そのパンを食べさせてくれないか」と頼みました。情け深い少女は、パンをあげてしまいました。そして、けなげにも「主のお恵みがありますように」とその男のために祈ってやるのでした。

また少女が歩いていると、前から同じくらい年の女の子がやってきて、「頭が寒くて凍ってしまいそうです。そのかぶっている帽子をおくれ」と言いました。そこで、少女はかぶっていた帽子をその子にあげました。女の子は喜んで去っていきました。

少女がさらに当てもなく歩いていると、今度は上着を何も着ていない子どもに出会いました。少女は、すぐに自分の着ている上着をあげましたので、肌着一枚になってしまいました。また歩き出しますと、今度はスカートをはいていない子どもに出会いました。「スカートがほしいよう」とその子が言うので、少女はスカートを脱いでその子にあげました。

歩いているうちに、日は落ちて、辺りが暗くなってくる頃、少女

は森の近くに辿り着きました。すると、今度は森から本当に丸裸の子どもが出てきました。「何か着るものがほしいよう」と泣いています。少女は、暗くなってきたし、誰にも見られないだろう、と肌着を脱いで子どもにあげてしまいました。とうとう少女は裸になっ
てしまいました。

と、そこへ、森の中から木こりのような男達が二人やってきました。「おい、可愛い女の子が裸でいるぞ」「こりゃあいい」と、少女に迫ってきます。少女は怯え、思わず、神様、助けてっ……と心の中で祈りました。すると、突如暗かった空が光り輝き、木こりたちも思わず空を見上げると、なんと一人の白い服を着た男がすーっと降りてくるではありませんか。三人は息もつけずにその光景を見ていました。やがて、男は少女の前に立ち、「乱暴な真似をしてはいけない」と言いました。「なにを！」と大柄なほうの木こりがいきなり殴りかかりました。男は、もちろん避けようとしたが、ふと、大変な事を思い出して、避ける事が出来ませんでした。「やっちなまえ！」と二人の木こりがポカスカとその男を殴って蹴って、「おとといきやがれ！」と捨てゼリフを吐いて去っていきました。

実は、この男の正体は、少女が心から信じているイエス・キリストなのです。そのイエスは実は「右の頬を打たれたら左の頬を差し出さない」と、誰が聞いても無茶な教えを言ってしまったので、少女の手前、木こりたちをぶっ飛ばすと言っ事が出来なかったのです。おかげで、鼻血は出るわ青たんは出来るはでさんさんな目に遭いましたが、そこは神様、すぐに自分で治療し、少女に微笑みかけました。

「もう心配はないよ。お前は今日とても貴い行為をしたね。今からそのごほうびをあげよう」と、両手を組んでひざまずいている少女に、まず服を着せてあげました。それから、星々が輝いている夜空に両手を掲げ、何かを祈りました。

「うわぁっ！」と少女が感激の声を上げました。なんと、空から無数のきらめく銀貨が降ってくるではありませんか。

少女は思わず目の前に落ちた銀貨を拾いました。すると、イエスは「ちよつと、ちよつと待ちたまえ」と声をかけ、少女の拾った銀貨の絵柄を見て、「ふう。これはカエサルのものではないな」と安心し、少女の手のひらに銀貨をもどしました。それから、一人せわしなく、地面に落ちた銀貨の絵柄を見ては、「ちっ、これはカエサルのものだ」「これは大丈夫」などと言って、一枚一枚チエックした後、それでも数百枚の銀貨を少女に手渡しました。そして、カエサルの模様の入った銀貨を、すごい勢いで森のほうへ投げ捨てました。イエスが人間であったころ、ローマ帝国にいろいろ嫌がらせをされて、機知を持って罠から逃れる時に言った言葉が「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返そう」だったのです。ですから、今でもカエサルの模様の入った銀貨など決して認めない、というのがイエスの考えなのでした。

「こんなにたくさん銀貨をありがとうございます、イエス様」少女は心からお礼を言いました。

「お前のその清らかな美しい心をこれから大事にするんだよ」とイエスは声をかけた後、再びまばゆい光とともに空へ帰っていきました。少女は、手に入れた銀貨のおかげで、一生幸せに暮らす事が出来ました。（終わり）

第二話 小人と靴屋さん

昔むかし、ある町に年老いた夫婦が靴屋を営んでおりました。昔はよく繁盛していたのですが、お爺さんがもう年なので、目も悪くなって、指も思うように動かず、ほとんど靴が作れなくなってしまいました。ある晩、注文を受けた革靴を夜遅くまで一生懸命作っておりましたが、ついうとうととしてしまい、お爺さんは眠ってしまいました。

あくる朝、作業台のイスに腰掛けたまま眠ってしまったお爺さんは、お婆さんに起こされました。

「爺さんや、眠るならベッドで眠ったほうがいいですよ」

「ああ、婆さんおはよう。わしは知らずに眠ってしまったのか。いかん、まだ革靴を縫い合わせる作業が終わってない」

「何を言ってるんですか。もう完成してるじゃありませんか」

そう言われて、お婆さんの指さす作業台を見ると、きちんと縫い合わされたきれいな革靴が一足出来上がっています。

「おや？ 眠ってしまったと思ったが、完成させていたのか。どうもおかしいな」

手にとって見ると、大変上手に縫いこまれていて、お爺さんは内心感嘆しました。

お昼になって、注文したお客さんがやってきて、

「これは素晴らしい。すっかりと作られている。どうもありがとうございます」

と言って、少し大目のお金を払って帰っていきました。お爺さんは、喜ぶと共に、納得できない、と言うような顔をしたのでした。

少したって、今度は一気に三足の注文が来ました。そのうち二人に出来るだけ急いで欲しい、と期日を切られたので、お爺さんはまた遅くまで一生懸命革靴を作っておりました。が、ある晩、また眠気に襲われ、知らぬ間に眠ってしまいました。明け方、ニワトリの

鳴く声で目が覚め、しまった、また落ちたか、と思っていると、なんと作業台とその横の机に、三足とも縫いあがって完成しているではありませんか。

「たまげた。これは絶対にわしが作ったんじゃない」

朝になつて、起きてきたお婆さんに事情を説明しました。お婆さんも首をかしげ、不思議なこともあるもんだね、と悩みました

「おや？ これはなんじやろう」

お爺さんが、ほこりをかぶった作業台の上に、妙なものを発見しました。それは小さな小さな足あとのように見えました。二人はそれを見てますます悩むのでした。

「お爺さん、一度がんばって二人で徹夜して、靴を作ってくれる人の正体を探りましょうよ」

「そうさな、じゃあ今度注文を受けたらわざと夜中に途中で置いておくか」

やがて、また靴の注文が来たので、お爺さんは夜遅くまで作業し、わざと寝たふりをしました。お婆さんは、作業場のダンボールの中に隠れ、見るための穴を開けて、そこからまんじりともせず店内をのぞき見ていました。暗い店内に、仄かにおぼろ月の光が差し込み、うつすらと部屋の様子が見えます。静かな時間が流れました。ふと話し声のようなものが聞こえて、おじいさんはますますタヌキ寝入りをしました。

「お爺さん、今日も疲れて眠ってしまったようよ」

「今日も僕達の出番が来たね」

「大きな声を出すとお爺さんが起きてしまうよ」

なんと、火の消えた暖炉の中から、指ぐらいの大きさの小人が五人出てきたではありませんか。暗くはつきり見えませんが、トンガリ帽子をかぶって、フリルのついた袖の服で、トコトコと歩いてきます。そして、作業台の脚を上り棒のようにすると上って、針や糸を手にし、みんな靴を縫いはじめたではないですか。

「おい！ そつちをもつと強くおさえろつて」

「なによ。いいからさつさと針を通しなさいよ」

「うわつ、しまった。革靴にニスを塗りすぎた」

「でかい声を出すな！ お爺さんが起きてしまうぞバカ！」

などと、てんやわんやの騒ぎで靴を縫い上げていきます。寝たふりをしているお爺さんは内心驚いたと同時に、可笑しくつて、思わず声を上げそうになってしまいました。ダンボールの中に隠れているお婆さんも、びっくりするやら楽しいやらで、声を出さないようにするのに必死でした。何しろ小人たちの声は、店内中に響き渡るほど大きいのです。

「よし、完成だ。あとは布で拭くだけ」

「これでお爺さんもまた喜んでくれるよ」

「よし、引き上げだ」

そう言つて小人たちは、またトコトコと暖炉のほうへ帰っていきました。作業台の上にはピカピカに光る革靴が一足出来上がっていました。ダンボールから出てきたお婆さんは、顔をあげたお爺さんと目を合わせ、二人でおかしくてたまらない、と言う風になっこり笑いました。

翌日、お婆さんは朝からミシンを踏んで、小さな小さな、カラフルで可愛い洋服を作りました。お爺さんの仕事を手伝つてくれた、せめてものお礼のつもりなのです。お店を閉めた後、作業台の上に六着並べておいておきました。きつと、夜中に気づいて取りに来るだろう、と考えるのです。それと、小さなケーキとクッキーも作つて置いておきました。やがて夜もふけた頃、お婆さんの予想通り、小人達がまた現われました。

「見て！ 可愛いお洋服が置いてあるよ」

「本当だ！ それにお菓子も置いてあるよ」

「これは俺のだ。お前はそつちの緑の服」

案の上今宵も大騒ぎです。誰がどの色の服をもらうかでひとしき

りもめた後、ケーキをパクパク食べながら、女の子の小人が言いま
した。

「こんなに可愛い服をもらったんだから何かお礼をしないとね」

「でも今日は作りかけの靴がないよ」

「フツ、俺はいい事を思いついたぞ」

男の子の小人が、全員にヒソヒソ声で何かを言いました。すると、
一同目を輝かせ、わーっと言いながら、暖炉のほうへ戻っていきま
した。そうしてしばらくすると、また全員戻ってきて、お神輿のよ
うに何かの箱を担いでやってきて、作業台に上ろうとしましたが無
理なので、仕方なく床にそのまま置いて、去っていったのでした。

翌朝、お爺さんが起きてお店兼作業場に来ると、床にきれいな箱
が置いてあります。何だろうと思っ手にとって開けてみると、ま
ばやく輝く宝石がたくさん入っています。お爺さんが腰を抜かして
いると、お婆さんもやってきて、二人で腰を抜かしました。

「一体これはなんじやろうか」

「まさか小人たちがお礼にくれたのかしら」

「どうにもこんな高価な宝石をもらうとは困ってしまうのう」

と、二人は戸惑いながらも、ともかく朝食を食べ、お婆さんは街
へ買い物に出かけました。すると、町のあちこちでこんな噂話が聞
こえます。

「ミントス伯爵の家に昨日泥棒が入ったらしいぞ」

「なんでも宝石が盗まれたそうな」

お婆さんはそれを聞いて、もしか、犯人はあの小人たちでは、と
思いました。そこで、大急ぎで家に帰り、お爺さんに事情を話し、
宝石箱をミントス伯爵の家まで持っていく事にしました。伯爵家で
は、なくなった宝石が全部見つかったので大喜びです。

「しかし、一体どうしてあなた方が持っているのですか」

「じ、実は、そのう、道で拾いました」

まさか小人が持ってきた、とも言えませんし、その証拠もないの

です。しどろもどろになるお爺さんを、伯爵は怪しいとも思いましたが、わざわざ盗んで返しに来る泥棒もいるまい、と思ってお礼だけを言ったのでした。二人は帰り道、今晚はあの子らに直接話をせねばなるまいよ、と話し合いながら帰りました。

夜になりました。お爺さんとお婆さんは、暖炉のほうへ向かって、小人さんたち、出てきておくれ、と呼びかけました。すると、しばらくして、例の六人が恥ずかしそうに出てまいりました。

「いつもいつも靴を作るのを手伝ってくれて本当にありがとうございました」
お爺さんは膝をついて、お婆さんの作った服に身を包んでいる小人たちの頭をなでました。小人たちはとても嬉しそうにしました。
「でもね、人の家のものを盗んできてはいけないんだよ。気持ちには本当にありがたかったけどね」

そう言いながらお婆さんも優しく小人たちに微笑みかけました。
一人が、思わず涙くみました。

「俺、お爺さんとお婆さんが喜んでくれるかと思って……ふぐ、えぐっ」

お婆さんは男の子を手に乗せて頬をすり寄せました。泣かなくていいんじゃないよ、との声に、かえって残りの五人たちも泣き出してしまいました。お爺さんが三人を手のひらに乗せ、お婆さんが残り二人を乗せて、靴作りのことを感謝しながら、泣き止むまであやすのでした。それから、お爺さんが疲れて眠ってしまった時には、小人達が現われて、靴作りを手伝ってくれたのでした。(終わり)

第三話 みにくいアヒルの子

とてもよく晴れた夏の日、森に面した大きなお屋敷の中の背の高い草に囲まれた池のほとりで、一匹のお母さんアヒルが巣の中のタマゴを暖めていました。毎日毎日タマゴを暖めていたので、お母さんアヒルは飽き飽きとしていました。

「ああ、退屈だわ。早く孵ってくれないかしら」

と、一人つぶやいていると、あちらからおばあさんアヒルがやってきました。

「どうだい、調子は。そろそろのはずだけどねえ」

「はい、体は元気ですが、退屈で死にそうです」

と、お母さんアヒルが言ったとたん、一つのタマゴの殻にひびが入りました。

「あつ、産まれるよ、ほら」

おばあさんアヒルが言うとおりに、一つ、またひとつと、次々にタマゴが割れ、中から可愛いアヒルの子が産まれました。

全部で四匹、いずれも毛並みの美しい子どもたちです。おばあさんアヒルがくちばしで毛づくろいをしてやりました。

「あら、でも後一個、この大きいのはまだね」

巣の中には大きなタマゴだけが割れずに残っています。

「おやあ、これはもしかしてシチメンチョウのタマゴかもしれないね。放っておいて、この子達を池に連れて行ったら？」

「うーん、でも、この子も私の子どもでしょうし……。孵るまで暖めます」

ならそうすればいい、とおばあさんアヒルは、子ども達を池のほうへ連れて行きました。お母さんアヒルはさらにしばらくタマゴの上に座っていました。すると、ビシツと音がして、大きなタマゴも割れました。中から出てきたのは、灰色の毛並みの悪いずんぐりとした子どもでした。

「おやまあ、なんてみにくい子が産まれたんだろう。でも、この子も私の可愛い子ども」

そう言っつて、お母さんは彼の毛並みを整え、池のほうへ連れて行きました。池には、仲間のアヒルたちがたくさんいました。

「あつ、お母さんアヒルも来たよ。あれまあ、なんてみつともない子どもを連れてるんだろう」

「ほら、だから言っつたじゃないのさ。それはシチメンチョウだよ、泳げやしないはずさ」

と、おばあさんアヒルは言いました。四匹の子どもアヒルも、珍しそうに新たにやつてきた仲間を見ています。

「本当にそうかしら。みんな、池に入っつてみますよ」

お母さんアヒルは生まれたての子どもをつれて、冷たい水の中を泳ぎはじめました。すると、四匹の子も、みにくいアヒルの子も、上手に泳ぎはじめました。それを見て、お母さんアヒルは、やつぱりあの子も私の子、と安心したのでした。

しかし、みにくいアヒルの子は、ニワトリにつつかれたり、アヒル仲間には受け入れられず、いじめられたりからかわれたりばかりの日々でした。そのうち、家族であるはずの四匹のアヒルの子も一緒になつて馬鹿にするようになりました。

「やーい、お前だけ灰色の汚れた子！」

「別にいいじゃないか」

みにくいアヒルの子は精一杯言い返しました。

「お前だけ橋の下で拾われてきたんだよ」

「お前は俺達の仲間じゃないんだよ」

などと言っつてくちばしでつつかれたりしました。仲間はずれにされ、いつもひとりぼっちでした。アヒルやニワトリだけでなく、この屋敷に住んでいる子どもまでみにくいアヒルの子を容姿で判断して、足で蹴つたりしました。そんな様子を見ていたお母さんアヒルは、いっそ産まれてこないほうが良かった、などと言いました。

それを耳にしたみにくいアヒルの子は、夜通し一人で泣いた後、ついにその家を出て行ってしまいました。

「ここにいるのはもう嫌だ。いじめられるし、毎日泣いてばかりだ」家の生垣を抜け、まだ暗い道をみにくいアヒルの子はとぼとぼと歩いていきました。すると、やがて大きな沼地に辿り着きました。

そこには、雁の群れがいました。アヒルの子は、あっちこつちに丁寧に頭を下げました。

「やあ、なんだかぶきつちよな感じの子が来たぞ」

「お前、一人なのかい。じゃあここに住めばいいよ」

雁たちは気さくにそう言ってくれました。アヒルの子は喜んで彼らのそばに腰を下ろし、水たまりの水を飲んで休みました。行くあても無いので、その沼地に二日ほどとどまっていると、一匹の若い雁が話しかけてきました。

「今から隣の沼まで行くけど一緒に行くかい？ デートをしに行くんだよ。でも、お前はみにくいからもてないかもしれないけどな」アヒルの子はついて行こうとしました。雁が空へ飛び立った、その瞬間、ガーンと大きな音がして、舞い上がっていた雁がそのまま落下して、沼の湖面に浮かびました。

「ニンゲンどもが狩りに来たぞ！ みんな、低く飛んで逃げるんだ」雁の群れは一気に飛び立ちました。が、アヒルの子はまだ飛べません。一人取り残され、必死に走って逃げていると、後ろから猟犬が追いついてきました。その時のアヒルの子の恐怖と言ったら、とても形容できるものではありません。やがて犬に追いつかれました。もう駄目だ、と観念しました。が、

「ちえ、こんなの届けてもご主人様は喜ばないや」

と、猟犬は踵を返して去って行きました。アヒルの子は安堵し、また何処へ行くでもなく歩いていくのでした。

やがて、日も暮れるころ、みにくいアヒルの子はとある農家へ辿りつきました。ずいぶんみすばらしい家でした。その時、激しい風

が吹きすさび、アヒルの子は立っていられないほどで、思わず開いていた扉から中へ入ってしまいました。するとそこには、大きな三毛猫がいました。

「お前は誰だい？」

用心深そうに尋ねられ、アヒルの子がしどろもどろしていると、奥から眼鏡をかけたおばあさんが出てきました。

「おや、これはアヒルかね。アヒルならタマゴを産むだろうよ。飼う事にするかねえ」

と言いながら、おばあさんは台所から野菜など持ってきてくれました。アヒルの子は安心して、その家に住む事にしました。この家には、さっきの三毛猫と共に、ニワトリも一匹飼われていました。

「おい、お前、私みたいにタマゴを産めるのかい？」

「わかりません。産めるかもしれない」

本当はこの子はオスなので産めないのですが、可哀相なアヒルの子はそんなことすらも教えてもらっていなかったのです。

「ふん、まあいいよ。ここのおばあさんはとても親切だ。おとなしくいい子にすれば追い出されることもないよ コツコツ」

こうして、アヒルの子はしばらくこの家で暮らしました。が、一日中家にいると退屈で、大空の下で元気に湖を泳ぎたいと言つような思いにとらわれました。が、怖いので言い出せずにいました。そんなある日、おばあさんがやってきて、

「駄目だね。お前はタマゴを産まないね。さあ、もう出ておいき」

と、アヒルの子を追い出してしまいました。また行き場のなくなつたアヒルの子は、仕方なくそこを去りました。

やがて秋が来ましたが、アヒルの子はどこにも受け入れてもらえず、一人ぼっちで生きていました。しかし、大自然で鍛えられたので、体は少しずつ大きくなってきました。紅葉した美しい山々の麓の池を一人で泳いでいたアヒルの子は、ふと目を上げると、とても美しい白鳥の群れが夕日を浴びて飛んでいるのを見まし

た。それはとても懐かしいような、不思議な気持ちでした。

「僕もあんなに美しければいじめられる事もなかっただろうなあ」
そう思いましたが、ですが、彼はいつまでも感傷的で弱々しい子どもではありませんでした。息をためて水にもぐり、また出て来る、そんな事を繰り返していました。そして、秋は過ぎ去り、厳しい寒さの冬がやってきました。ある晩、うかつにも水に入ったまま眠ってしまったアヒルの子は、朝になって、足が凍って抜けなくなってしまいました。どうしようもなくいると、そこへたまたま農夫が通りがかりました。

「おう、かわいそうに」

と言いながら、氷をゆっくりと割って、アヒルの子を助けてくれました。足がかじかんで動けないアヒルの子を、農夫は家に連れて帰りました。暖炉の前に寝かされたアヒルの子は、すぐに元気を取り戻しました。冬なので外へ遊びに行くのが嫌な農夫の子どもたちが、大喜びでアヒルの子を追いかけ回し、アヒルの子はびっくりして逃げ惑い、ミルクの入った坪に飛び込んだり、プディングの入った食器を倒したり、ほうほうの体でその家から逃げ出したのでした。

寒く厳しい冬を、アヒルの子は耐え抜きましたが、その想像を絶する辛さと言ったら、とても書き表せません。しかし、彼は生き延びました。暖かな日の光が世界中を祝福するかのように満ちる中、遂にアヒルの子は空を飛べるようになりました。

「うわあ！ 空を飛ぶってこんなに素敵なことなのか！」

アヒルの子は大喜びで空を舞いました。すると、彼方のほうから、三匹の大きな白鳥が飛んでくるではありませんか。アヒルの子は怯えました。またいじめられるのか、と。でも、なんだかもういや、みたいな気分にもなりました。あんな美しい鳥にならいつそ殺されてもいいや、と思いました。彼らはアヒルの子のそばで止まりました。そして、こう言いました。

「やあ、新しい仲間だね。僕達の住んでいるところへ案内するよ」

アヒルの子には訳が分かりませんでした。仲間？首をかしげていると、

「キミは自分の姿を見たことがないのかい」

そんなわけはありません。何度も水面に写し、僕はなんてみたくいんだろう、と嘆き悲しんでいたのです。

「とにかくおいで。僕らは美しい湖のほとりに住んでいるんだよ」
状況の把握できないまま、アヒルの子は三匹の美しい白鳥について飛んでいきました。青い空から湖に舞い降りるその時、アヒルの子は見ました。自分の姿が彼らと変わらない見目するわしい真っ白の姿になっているのを。

「そんな!？」

とアヒルの子が驚いていると、そこにいるたくさんの白鳥たちが歓迎してくれました。湖の辺にはニンゲンの家族が遊びに来ていました。

「ママ！また新しい白鳥が飛んできたよ」

「今度来た白鳥が一番美しいね」

ニンゲンの子どもだけでなく、周りの白鳥も口々に讃えてくれました。アヒルの子は、驚きと喜びで、思わず泣き出しました。ずっと、悔し涙と寂しさや悲しみに泣き続けていましたが、今度のは嬉し涙なのです。

「ああ！僕が実は白鳥だったなんて！信じられない」

新しい仲間が急に泣き出したので、一人の美しいメスの白鳥が歌を歌って慰めようと思いました。

明けない夜はなく 希望の絶える朝もない

今日流す涙は 明日に虹をかける

喜びの歌を歌おう 幸福を呼ぶために

神は天にいまし 世は全て善し

その晩、白鳥になったアヒルの子は一つの決意をしました。

次の日、彼は大きな翼をはためかせ、とある場所へ向かいました。そう、彼をいじめたアヒルたちが住んでいる家にです。逃げ出して以来、一度も足を踏み入れていませんでした。空から見下ろすと、お母さんアヒルと四匹のアヒルの子が池のそばで腰を下ろしてくつろいでいました。

ブワブワアサ、と大きな羽音を立てて舞い降りました。全員びつくりしています。

「久しぶりだな、おい」

言うなり白鳥は羽を広げ、激しく回転しました。体の大きさも、力も段違いなので、アヒルの子はなぎ倒され、一匹は池に落ちました。

「あなたは誰！ いきなり何をするの！」

そう言ったお母さんアヒルを、白鳥は蹴飛ばし、くちばしで何度ももつつきました。

「俺は、俺は、みにくいアヒルの子だ。お前らにいじめられた、な」
そう言うと、彼は肩を落としました。アヒルたちは呆然として、

何も言えません。一匹が、

「い、いじめて悪かったよ、許してくれ、ごめんなさい」

と謝ると、他の三匹も口をそろえて平謝りをしました。お母さんアヒルは泣いています。もう、これ以上は何も必要ありません。

白鳥は空高く飛び上がりました。その両目にはうっすらと涙が浮かんでいました。おそらくこれが彼の流す最後の涙になることでしょう。空はどこまでも青く澄み、彼はそこへ溶け込むように消えていきました。（終わり）

第四話 人魚姫

ここは深い深い海の中、日の光も差さぬような海底に、人魚の王様のお城があります。上半身は人間で、下半身は魚という姿で、王様は立派な御殿の中に住み、そして、可愛い六人の娘、人魚姫たちとともに住んでいました。人魚姫たちは、十五歳になるまでは海底から出てはいけない、という決まりになっていました。そして、今日、末娘の人魚姫は誕生日を迎え、賑やかな誕生パーティーを開かれ、とても幸せでした。

「お父様、私もとうとう十五ですので、海底を出て、外の世界を見たいわ」

「うむ、お前も大きくなったな。気をつけていくんだよ」

こうして人魚姫はお姉さん人魚たちにお城の門から見送られ、大喜びでお城を泳ぎ出て行きました。

早く太陽という物を見たいわ。暖かく、力強く輝いていると聞かぬ。大空も、真っ白な雲も見たいし、緑の山も見たい。人魚姫は胸を躍らせて、いよいよ海面に顔を出しました。しかし、どうも様子が変です。空には雨雲が満ち、既に雨は降り注ぎ、風は唸り、波は高く、嵐がやってきているのです。

「あら、つまらないわ。美しい太陽と青空を見たかったのに」

天候が悪いので、人魚姫はつまらなく感じて、再び海底に戻ろうとしました。その時、向こうのほうに転覆している船があるのを発見しました。泳ぎ着いてみると、一人の人間が波間を漂っています。意識はなさそうで、放っておけば助からないでしょう。

「かわいそう。助けてあげようかしら」

人魚姫はそばに行つてその人間の顔を見て驚きました。大変顔立ちの整つた凛々しい美男子で、思わず頬が赤く染まりました。なんて素敵な男の人なのでしょう。人魚姫は彼の体を抱いて陸へ向かつて泳ぎながらも、胸のときめきを抑えられませんでした。人魚姫は

恋をしたのでした。

彼を砂浜の安全な場所まで運び、自分は少し離れた岩の影で様子を見ていました。誰かに見つけてもらうまで、離れたくても心配で離れられなかったのです。幸い、通りかかった大人の女性がすぐに気づき、慌てて走って行って、すぐに大勢の人が集まってきました。どうも様子を見てみると、偉い身分の人の様子です。それもそのはず、彼はこの国の王子様なのでした。見つからぬように水に潜りながら会話に耳を澄ますと、

「本当に無事でよかった。王子様に何かあれば国中が大騒ぎだ」

「意識が戻らないな。おんぶしてお城に連れて帰ろう」

「女よ、よく王子を見つけてくれた。ほうびを取らせるから城までついて参れ」

大柄な兵士風の男が王子を背負い、一同は海岸から去っていきました。じつとその様子を海に潜んで見つめていた人魚姫は安心して海底へと戻っていったのでした。

人魚姫はあの日以来、もう一度あの王子に逢いたくて仕方の無い日々を送っていました。あるとき、上から二番目の体の大きくて頼りがいのある姉さま人魚姫にどうしたの、最近ふさぎこんでるよ、と聞かれたので、正直に答えました。すると、

「あなたは馬鹿ねえ。人間とは住む世界が違うのよ、忘れなさい」

と、言われてしまい、そのとき以降、家族や人魚仲間には一切この事は話さないようにしました。

ある日、思い立って、深い海溝の奥に住む魔法の元を訪ねました。本当は関わってはいけない、と言われているのですが、色んな魔法を使えるともつぱらの評判でしたので、人魚姫は決心して魔法の館を訪ねたのでした。

「こんにちは」

「おや、人魚姫が来たよ。こんなところになんの用だい？」

「私、人間になりたいの」

魔女は、一瞬目を丸くして、その後口元をゆがめて笑い、

「理由は聞かない、その願い叶えてやるう。ただし、お前の美しい声をもらうよ」

人魚姫は一瞬とまどいましたが、やがて言いました。

「いいわ」

「ヒツヒツ、じゃあ今から悪魔と契約を結ぶよ。条件付だ。お前は頑張つてその理由を成就させないといけないよ、人間になりたい理由だよ」

「理由……あの人と結ばれたいんだわ」

「じゃあ頑張つて結婚するんだね。失敗したらお前は海の泡になつて消えてしまうよ、アブラカダブラー！」

人魚姫は意識を失いました。が、すぐに目覚めました。美しい鱗が覆っていた下半身は、今は美しい二本の足に変わっています。

「さあ、願いは叶えたよ。誰だか知らないが、口もきけない女と結婚してくれるのかねえ、アーヒヤヒヤ」

人魚姫はキツと魔女を睨みつけました。

「おお、怖い怖い。そんな顔をされてもね。さ、サービスで美しい服を着せてあげよう」

「？」

「お前知らないのかい。陸地の人間は体に布切れをまとっているんじゃないよ、わしのようにな」

魔女が何か呪文のようなものを唱えると、人魚姫はたいそう美しいスカイブルーのドレスを着せてもらいました。そこでいちおう人魚姫は魔女にお礼を言って、陸地目指して一生懸命泳ぎはじめました。ところが、下半身がなんだか使い勝手が悪い上に、邪魔な衣服をまとっているのになかなか海底を脱出できないのでした。それでもなんとか砂浜に辿り着き、お城を探して歩きはじめました。道行く人は、大変美しい女性が、ずぶ濡れのドレスを身につけて歩いているので、好奇の目を向けて噂話をしました。

「お美しいお嬢さん、どこへ行くんだい？」

汚れた黒いジャケットを着た若い男がナンパ目的で声をかけてきました。声の出ない人魚姫は既に見えている大きなお城を指さしました。

「ああ、あんたも王子様の婚約の晩餐会へ向かってるのかあ、俺らとは身分が違うね」

男は冷やかし風に行って、後ろを向いて立ち去りました。人魚姫は耳を疑い、質問しようと思いましたが、魔女との取引のせいで声が出せません。王子様はもう婚約している？半信半疑でお城の近くに着くと、立て看板のようなものがあり、王子様、隣国のマリア女王と婚約す、と書いてありました。人魚姫は目も当てられないくらい失望し、真っ青になって涙を流しながら、行く当てもなくさまよい歩き、ついに崖になっている海岸へと辿り着きました。

（悪魔との契約では、王子様と結婚しないと海の泡になってしまうんだわ）

人魚姫は今さらながら軽率な契約を悔やみました。が、もうどうしようもありません。

（ならいっそ、ここから身投げして死んでしまおう）

そう思った人魚姫は、一気に崖から身を投げました。が、体は岩にも海面の水にも叩きつけられませんでした。人魚姫の体を、二番目の姉さま人魚姫がしっかりと受け止めて抱きしめていました。そばには最年長の姉さま人魚姫もいます。

「こんな事だろうと思ったよ」

末っ子人魚姫は、優しく力強い姉さまに抱きしめられて、おいおい泣き出しました。

「泣かなくていいんだから。おや、声が出ないのかい。どうせ海溝の魔女のところにも行ったんでしょ。足まであるじゃないか」

二人の姉さま人魚姫は顔を見合わせて笑いました。そして、最年長人魚姫が優しく彼女の頭をなでました。

「私たちが全て解決してあげる。さ、私たちのお城に帰りましょ」
こうして三人は海底深くのお城まで戻っていきました。

「来たわね」

ここは末っ子人魚姫の部屋で、二人の姉さまが待つていました。陸の王子様が結婚したので、契約を破られた、と悪魔がやってきたのです。

「グロロ。その小さい人魚姫を泡にしにきてやったぞ、ウヒヒ」
真っ黒な体に妙な形の羽を動かし、槍のようなもので刺そうとします。

「悪いけどその契約は無しだね」

言うなり二番目の姉さま人魚姫がその槍を取り上げてへし折り、慌てる悪魔の首を掴んで180度回転させました。グギユ、と声を上げて悪魔は死にました。と同時に、魔法が解けて、末っ子人魚姫の足は無事美しい鱗に包まれた魚状に戻りました。

「後は声だね」

「私が海溝の魔女のところへ一人で行ってくるよ、みんなで行くのも面倒だしさ」

「……命までとらなくてもいいからね」

二番目の姉さま人魚姫は、半笑いで泳ぎ出て行きました。それからおよそ一時間後のこと。

「あつ、！ 姉さま、私、声が出るようになったわ！」

最年長の姉さま人魚姫は、それからしばらくお小言をした後、やさしく妹の頬に口付けて、自分の部屋に帰っていきました。末っ子人魚姫は、お城の門で二番目の姉さまの帰りを待ち、彼方にその姿を見つけると、嬉しそうに声を上げて、迎えに行くのでした。（終わり）

第五話 金の斧と銀の斧

昔々あるところに、正直者の若い木こりがおりました。ある日、湖のほとりの森の木を持つている古い斧で切っております。

しかし、斧が木に引つかかって抜けなくなってしまい、そこで足をかけて力いっぱい斧を抜こうとしました。

「ああっ！」

木こりが力いっぱい引き抜くと、勢い余って斧が後ろに飛んでいってしまい、湖に沈んでいってしまいました。

「困った。斧がないと仕事が出来ない。今日中に五本は切り倒さないといけないのに」

とうとう木こりは泣き出してしまいました。すると、突然湖が虹色に光輝き、水の中から美しい女神が出てきたではありませんか。

木こりが呆然としてみると、女神は手に持ったまばゆく輝く金の斧を差し出しながら木こりに近づいて、

「木こりよ、あなたが湖に落としたのはこの金の斧ですか」

と聞きました。木こりはかぶりを振って、

「いいえ、女神様。私が落としたのはそれではありません」

と正直に答えました。すると、女神は今度は美しく光輝く銀の斧を取り出し、

「では木こりよ、あなたが落としたのはこの銀の斧ですか」

と尋ねました。木こりは今度も正直に

「女神様、それも違います。もっとボロツちい斧です」

と答えました。すると女神は先ほど木こりが落とした古い斧を取り出し、

「では、この古い斧ですか」

と問いました。

「そうです、それでございます」

と木こりが答えると、女神は微笑んで、

「お前は正直者ですね。ご褒美にお前にはこの三種類の斧全部をあげましょう」

と言つて、三本の斧を木こりに手渡すと、また湖の中へ消えていったのでした。

その夜、大喜びで村に帰つた若い木こりは、今日起こつたことを正直に村のみんなに話し、みんなに羨ましがられたのでした。

その話を伝え聞いた村の別の欲深い若者は、よし、俺も同じことをしてやるう、と意気盛んに次の日にあの湖へぼろい斧を持って向かいました。向こうのほうに若い木こりが今日も木を切っているのが見えます。ふふふ、俺も金の斧をゲットしてそれを売り飛ばして大金持ちになつてやるぜ。鼻息も荒く、さつそく持つている斧を湖に放り込もうとした瞬間、足元が崩れて、欲深い若者はザンブと体ごと湖に落ちてしまいました。それを見ていた若い木こりは、いけない、助けに行かなければ、とそこへ走りました。欲深い若者はなかなか上がつてきません。木こりが困っていると、またもや水面が七色の光を放ち、昨日の女神様が一人の若者と共に現われました。

「木こりよ、お前が落としたのはこの凜々しい若者ですか」

見れば背格好は似ているものの、風貌は遙かに立派で性格も良さがな好青年です。木こりは首を振つて否定しました。

「いいえ、女神様。落ちたのはその若者ではありません」

すると、その立派な若者は消え、次はもう少し普通な感じの清潔そうな青年が出てきました。

「木こりよ、ではお前が落としたのはこの若者ですか」

「いいえ、女神様。落ちたのは別の若者です」

するとその若者も消え、最後にあの欲深い若者がびしょ濡れになつて泣きべそをかきながら現われました。

「あ、おい、俺を、俺を助けてくれよお」

女神は幾分引きつった顔をしながら、落としたのはこの若者ですか、と聞きました。このバカ者ですか、に聞こえたのはきつと気の

せいなのでしょう。

「そうです女神様、落ちたのはこの青年です」

と木こりが答えると、女神はにっこりと微笑んで

「お前は正直者ですね。ご褒美にお前には三人の若者を渡しませう」

と言うと、木こりのそばにさっきの凜々しい若者と清潔な若者と欲深い若者の三人を置いて湖に戻っていきました。

「おい、助けてくれてありがとうよ」

と決まり悪そうに欲深い若者が言いました。困ったのは木こりです。二人の青年はにこやかに爽やかにそこに待機しています。

木こりにアツチ系の趣味があればよかったです。木こりはきわめてノーマルであったので、ともかく村に連れて帰り、二人にこれから自由にしていいい、と許可を与えました。二人はそれぞれ仕事を探すために去っていきました。その日のうちに欲深い若者の失敗は知れ渡り、さしもの若者も恥じて、二度と安易な行動を取らなくなりました、とき。(終わり)

第六話 マッチ売りの少女（この話からかなりの原作破壊が始まりますw）

それは寒い寒い冬の事でした。一人のみすぼらしい格好をした少女が街の大通りで木枯らしに吹かれながらマッチを売っていました。

「マッチ、マッチはいかがですか」

しかし、通り過ぎる人は誰もマッチを買ってくれません。少女はかじかむ手に息を吹きかけながら、知らず知らず自らの運命を呪っていました。お父さんは飲んだくれて脳の血管が切れて死んで、お母さんは若い男と駆け落ちし少女を捨てて、今は血も涙も無いお金持ちになんとか拾ってもらい、馬小屋のようなところで寝起きする毎日でした。マッチが売れないで帰ってくると、ムチで打ったりする酷いご主人で、少女のまっすぐなはずの心も次第に歪んで歪んでくるのでした。

見上げると、雪まで降ってきました。雪が頭や肩に降り積もっていくその惨めさ。

とある瞬間に、少女の何かがぶち切れました。こんな事やってられない。少女は足早に裏通りに向かい、ちょうどよい燃やせそうなゴミの山を発見すると、即座にマッチで火を付けました。

「うふふ、暖かいわあ」

炎に照らされる少女の顔は狂気に歪んでいました。もっと、もっと、もっと燃やすんだ。などと考えていると、どうも声が聞こえます。どこ？と探してみると、ゴミの山の上に、真っ黒な体の耳のところがった悪魔がいるではありませんか

「哀れな少女よ、ウケケ、その調子で燃やせ、人の家に放火しまくるんだ」

「お前は悪魔なの？」

「そうだ。お前には無慈悲で残酷で醜悪なカスのような人間を殺すつくす権利がある。一人殺すたびに」

そう言いながら悪魔は金貨を取り出して、少女のほうに投げまし

た。

「金貨を一枚やろう。さあ、行って来い。キシヤシヤシャー」

見たこともないような黄金に輝く金貨を見て、少女もウフヒと笑い声をあげ、少女自身のための復讐劇が始まりました。

まず、木造の家を狙わないといけません。慎重に街を歩いては、木造住宅を見つけ、ゴミ箱から古新聞などを漁り出し、片端から火をつけて回りました。三ヶ所も放火すると街は大騒ぎです。

「ウーフフ、ヒヒヤハ、見たまえ、人がゴミのようよ！」

火がついた家からはおばあさんや子どもや乳飲み子を抱えたお母さんなどが逃げ出しています。赤ん坊は恐怖におんぎゃーと泣いています。

少女はその有様を見て、最初はざまあみろ、と笑っていましたが、雪の降る夜ですので、自然と全ての火は消えてしまい、ボヤ程度で鎮火してしまつたのでした。

「駄目じゃん。誰も死んでないから金貨がもらえないわ」

そこで少女はペンキ屋へ行って、塗料などをさっきの金貨で買い込みました。そして、少し歩いて、街外れの自分の家へ戻りました。「どうせ殺すならまずあの血も涙も無いご主人様からぶつ殺してやるわ」

家の回り数ヶ所と、出入り口全てに塗料を撒き散らし、順次火をつけて回りました。雪の降る中でも、可燃性の高い塗料は勢いよく燃え始めました。

「ウーフヒ、今度こそ皆殺し！」

と、少女は遠巻きに自分をこき使つていじめたご主人様の住んでいる大豪邸が燃え上がるのを小気味よく見ていました。

すると二階の窓のところに女中のメアリーがいるのが見えます。窓を開けて、外に向かって「助けて」と叫んでいます。メアリーは少女に大変優しくしてくれたお姉さんのような存在でした。残り物をくれたり、本を貸してくれたたりする人でした。そのメアリーが泣きながら、遂に窓から飛び降りました。ああ、と少女は声をあげ

ました。メアリーは飛び降りた庭で動かなくなっていました。少女は、とつさに駆け寄ろうと思いましたが、ふん、ふん、知らないもん、と自分に言い聞かせて行くのを止めました。

館はいよいよ激しく炎上しています。入り口の扉が燃え尽き、火を噴いている中から飼い犬のムク犬のトーマスが飛び出してきました。少女とは大の仲良しで、いつも遊んでいた犬です。体中に火がつき、外に出た時点で力尽き死んでしまいました。

「トーマス!!」

少女は思わず隠れていた場所を飛び出してトーマスに積もっている雪をかけました。しかし、手遅れでした。少女は号泣しました。私はなんと言うことをしてしまったの、と激しい後悔の念が襲いました。少女は、自分を取り戻したのです。

「神様、お願い！ この家の火を消してください！」

少女は泣きながら天を仰いで叫びました。しかし、そこへ現れたのはさっきの悪魔です。

「ふん、犬か。じゃあまず銀貨一枚だ」

悪魔は赤い舌をチロチロさせながら少女に銀貨を投げました。しかし、少女はその銀貨を悪魔に投げ返しました。

「こんな物要らない！ トーマスの命を返して！」

「そんなこと言っても火をつけたのはお前だぞ、キキキ」

「私が間違ってたわ。誰かを殺しても何の意味もない。それどころか、メアリーお姉さんとか、トーマスとか、私の大事な人ばかり傷つけてしまったわ。憎しみに心が狂って、二人もここに住んでいる事すら忘れてた。神様！ 神様、この家の火を消してください！ その代わりに私が死んでもいいわ！」

その瞬間、空が真っ白に光り輝きました。館の火はすべて消えました。少女が何が起こったのかわからないでいると、頬を誰かに舐められました。なんと、トーマスが生き返っているではありませんか。そして、ふと見ると、悪魔の姿は無く、一人の美しい白衣に身を包んだ男の姿がありました。

「よく気づいたね。そして、最後のお前の懺悔、自らの命であがな
いたいと言うほどの気高い言葉、確かに聞かせてもらった」

「あなたは……神様？ それともさっきの悪魔？」

「どちらだろうね」

白衣の男は言葉を濁し、全ては元通りになっている、と告げ、最
後にこう言いました。

「お前の側にはメアリーもトーマスも、そして誰よりこの私もいる。
強く生きなさい」

そう言うと白衣の男はスーツと空へと浮かんで、消えていきまし
た。雪は既にやみ、一面はただ白銀の世界なのでした。

「お帰り、綺麗に雪が降り積もったね、寒かったでしょう」

メアリーが歩いてきて、優しく少女を抱きしめました。少女は、
強く強くメアリーにしがみつきました。（終わり）

第七話 シンデレラ

昔むかし、とある国の立派なお屋敷に、シンデレラという女性がいました。大変美しい女性でしたが、みなしごであったため、女中として働いていました。そのお屋敷には意地悪な姉妹が三人住んでいて、いつも女中のシンデレラをいじめているのでした。

「シンデレラや、床が汚れているよ、拭きなさい」

言われたシンデレラがその通り床を雑巾で拭きおわった後、またわざと飲み物をこぼして、何度も拭かせるというような感じでした。そんなある日、国王が主催する豪華な晩餐会、ダンスパーティーが開かれる事になりました。三姉妹も参加出来ると聞いて大喜びで準備を始め、シンデレラにあれを買ってこいこれを買ってこいと命じました。お金を渡されて、金模様の力チューシャやきらきら光るドレスなどを買うとき、

「ああ、私もこんな美しいドレスを着て舞踏会にいけたらどんなに幸せかしら」

と思い、悲しくなってしまうのでした。

やがて、晩餐会当日になり、姉妹らは一家揃って国王の宮殿へと出発し、シンデレラは一人留守番をしていました。

「私も行きたいわ。でも、意地悪なあの人達がいなただけのんびりできるわ」

と、汚く狭い自分の部屋の窓を開け、美しく輝く夜空の星を見つめてうつとりと夢想到に耽っていました。

「あ、流れ星」

きらめく流星が見えたので、シンデレラは、私も晩餐会に参加させてください、と思わず祈りました。途端に、部屋中が金色の光に包まれ、気づくと、部屋の中に一人の羽の生えた天使がいるではありませんか。シンデレラが驚いていると、天使がにっこり微笑んで

シンデレラに話しかけました。

「可哀想なシンデレラ、私があなたの願いを魔法で叶えてあげましよう」

言うなり、持っていた杖のような物をシンデレラの頭上で振りかざしました。途端に、シンデレラの頭には美しいティアラがつき、髪は緩いウェーブがかかり綺麗に整えられ、服は輝くパープルのドレスに、そして足は透明に光るガラスの靴を履いています。ひびの入った鏡でその姿を見たシンデレラは喜びの声をあげました。

「なんて素晴らしいんでしょう！ お姉さまたちのドレスよりも美しくお洒落だわ！」

天使はどこかへ行ったかと思うと、またすぐ戻ってきました。

「さあ、シンデレラ、馬車も表に用意してあげたから、急いで舞踏会へ行つてらっしゃい。ただし、この魔法は12時までしか持たないから、それまでに帰って来るんですよ」

それを聞くと、シンデレラは少しがっかりしましたが、ちゃんとうなずきました。

「わかりました。天使様、本当にありがとう」

表に出てみると、かぼちゃの馬車と、ねずみの従者がいました。乗り込むと、一目散に宮殿へと走っていきます。

あつという間にお城の宮殿に辿り着きました。シンデレラは、好奇心と嬉しさで物怖じせず中へと入っていきました。宮殿の中では大勢の着飾った人々がオーケストラの調べに乗って優雅に踊っています。シンデレラは少し気後れして、おずおずしていました。が、その美しさは男性の目を引かずにいません。

「今やって来たお嬢さんはどこの誰だろう。大変美しい」

来ていた名家の息子たちは先を争ってシンデレラの周りに集まり、一緒に踊ってくれるよう熱望しました。シンデレラはぎこちなく一緒に踊りましたが、みな丁寧に教えてくれたのでなんとか上手にこなせました。それを見ていたのはこの国の跡取り、ルイヒ王子で

す。即座に自分もダンスを求めました。王子は大変品の良い美男子で、シンデレラは余りに嬉しくて頬が赤く染まりました。夢じゃないかしら、いつまでもこうしていたい、と思いました。その姿を見つけた三姉妹は驚きと戸惑いの声をあげました。

「お姉さま、あれはもしかしてうちのシンデレラじゃない？」

「まさか。あんな服持つてるわけない。他人のそら似でしょ」

などと三人が言っているうちに、ルイヒ王子はシンデレラを自分のテーブルに連れて行き、一緒にお酒など飲むのでした。シンデレラは飲みなれぬお酒に酔い、時間の経つのも忘れていると、ふと柱時計を見ると後3分で12時ではないですか。

「大変！魔法が解けてしまうわ」

シンデレラは挨拶もそこそこに、宮殿を飛び出していきました。

「シンデレラ姫！ 待ってくれ」

ルイヒ王子の声も無視し走ったので、ガラスの靴が片一方脱げました。それすら気にせずかぼちゃの馬車になんとか飛び乗りました。「ふう、これで大丈夫だね。王子様に汚い服を見られなくてよかったです」

と言ってるうちに12時が来ました。シンデレラはもとのみすぼらしい服に戻ってしまい、馬車もただのかぼちゃに戻り、シンデレラは道でステンと転がってしまいました。なんとか家には辿り着けたのでした。

それからしばらくしたある日、シンデレラがあの日思い出にひたりながら洗濯をしていると、お屋敷に王家からの使いがやってきました。

「この靴を履ける女性を探している、王子はその者と結婚したいと申している」

と使いはおごそかに言い、姉妹三人にガラスの靴が履けるか試してみよ、と言いました。それを聞いて三姉妹は王子と結婚したい余り、足の指を折ってでも履いてやる、とがんばりましたがやっぱり

駄目でした。使いが帰ろうとすると、そこへシンデレラが進み出て「私にも履かせてください」

と申し出ました。三姉妹はあんななんか履けるはずがない、ひっこんでろと口々に騒ぎました。使いは、実はあの日も王子のそばで護衛をしていた人間でした。

(確かに似ている……面影がある)そこで、名を聞いてみました。

「シンデレラと言います」

「なんと！ 探している女性の名も実はシンデレラなのだ。よし、履いてみなさい」

透き通る光を湛えたガラスの靴は、もちろんシンデレラにぴったりでした。それも当然、彼女の足にあわせて作られた靴なのですから。

「おお！ 遂に見つかったか！ さあ、シンデレラ、今すぐ王子に会ってください、あの日以来恋わずらいで一日も早く探し出せと書いておられるのです」

こうして、シンデレラは再びルイヒ王子に会うことが出来ました。王子は感激し、是非僕の妻に、と結婚を求め、シンデレラも大喜びで承諾し、二人はすぐに盛大な結婚式を挙げ、幸せな生活を始めました。

それから数年が経ち、ルイヒ王子のお父さん、ルイヒ15世が老衰で亡くなってしまう、ルイヒ王子がその後を継いで、ルイヒ16世となり、この国を治める王に就任しました。

シンデレラは王妃となり、まさにこの世の栄華の全てを謳歌しました。

ところが、実はこの国には不穏な空気が流れていました。王やその一族だけがぜいたくをして、庶民はいつまで経っても貧乏だ、こんなのはおかしい、と言う不満が強く募っていて、王を倒そうという革命の気運が出てきていたのです。ところが、ルイヒ16世はそ

ういった世の中の動きに対応できませんでした。また、シンデレラ王妃は、ぜいたくな暮らしにすっかり慣れて、庶民が食べ物にすら困っていると云う事を聞くと、

「パンが無いならじゃがいもでも食べてればいいじゃない」

などと国民の怒りを誘発するような事を言ってしまうのでした。かつて、女中として貧乏な暮らしをして、そういう生活の苦しみを誰よりも知っていたはずのシンデレラは人が変わってしまいました。拳句は、優柔不断な夫を尻目に、自分が政治の指揮を執り始め、抗議デモの弾圧やさらなる増税を実施させたのでした。

そして、ある日庶民が大規模な形で決起しました。王の軍隊はあつという間に負けました。ルイヒ16世の住む宮殿も陥落し、王とシンデレラ王妃は革命の徒達の手によって捕まり、牢屋に放り込まれ、そして、形ばかりの裁判が始まりました。シンデレラ王妃も裁判所に引つ張り出されました。いるのはみな敵ばかり。シンデレラは、その人たちの姿を見てはつとしました。みな、ぼろぼろの汚れた穴の開いたような、昔の自分が着ていたのと似たような服ばかりです。シンデレラは昔の自分を思い出し、思い上がった今の自分を恥じました。裁判は身もふたもなく、最初から結論は決まっていたのでした。

「判決、シンデレラ王妃、明日、ギロチンにより首の切り落としによる処刑」

満場から拍手喝采が沸き起こり、シンデレラの目の前は真っ青になりました。暗い牢屋に再び放り込まれ、シンデレラはずっと泣いていました。その涙は、自分の運命を嘆いていると言うよりは、自分がしてきた事が間違いであった、と言う事に気づいて後悔している涙でした。いつもいつも貧乏に苦しんでいた自分なのに、いつかそういう人たちをさげすみ、馬鹿にして、自分の事ばかり考え、贅沢三昧に堕ちてしまっていた。シンデレラは嗚咽しました。

どれぐらい時間が経ったでしょう、牢屋の小さな格子窓から、ほのかな月明かりが見えます。シンデレラはぼんやりと思い出していました。あの日、天使様が私に奇跡を起こしてくれて、そこから全てが始まったんだわ。ふと思いました。天使様は、私にこの国を良くするために、王妃にしてくれたんじゃないかしら。にも関わらず、私ときたら、金銀財宝に歓喜し、悪政の限りを尽くした。

「ああ！ 天使様。弱い者そのものであったこの私なのに、同じような人々の痛みもわからずに、なんと恥ずかしい存在なのでしょう、私は！」

その瞬間、牢屋の中が黄金の光に包まれました。そして、あの時の天使が再び現れたのです。

「シンデレラよ、ようやく気づいたんだね。”可哀相だった昔の自分”を、どうやってたら救えるか、もう一度だけチャンスあげましよう」

天使はシンデレラの頭のうえで優しく手を振りました。

気づけば、そこは王宮の一室でした。ルイヒ16世と向かい合い食事をしています。

「国民の税金を上げるべきかどうか悩むところだ」

シンデレラは気づきました。今は、初めてルイヒ16世に政治の相談を受けた瞬間だ、そこまで戻ってきたんだ、と。シンデレラはきっぱりと力を込めていました。

「下げてあげるべきです。私たちが、簡素な生活を目指せばいいだけのことです」

ルイヒ16世は驚いたように顔を上げました。シンデレラには、もう一点の迷いも無かったのです。（終わり）

第八話 おやゆび姫

昔むかしあるところに、一人で暮らしているハンナと言う若い女の子がおりました。しかし、一人では淋しいので、誰か一緒に住んでくれる人はいないものかと思っていました。ある日、花畑に大変美しい咲きかけのバラがあったので、抜いて持ってかえって、自分の家の庭に植えると、すぐに花びらが開きました。すると、驚いた事にそこから小さな親指ぐらいの大きさの女の子が出てきたではありませんか。ハンナが驚いていると、

「こんにちは。私の名前はおやゆび姫よ。これから仲良くしてね」としゃべったので二度驚きましたが、よい話し相手が見つかったと大喜びして、早速家に連れて行くのでした。

おやゆび姫はよく食べよく眠りましたが、ちつとも大きくなりません。ハンナがどうしてかしらね、と誰とも無く言ってみると、

「私は小さいのが長所なのよ。大きくなんかなりたくないわ」

とおやゆび姫が言うので、そうだね、と言って頬に摺り寄せるのでした。

また、おやゆび姫は不思議な力を持っており、手を触れず物を動かしたり、薪に火をつけたり出来るので、ハンナは驚くと同時に、頼りになる子、とも思っていました。が、魔女狩りに遭うといけないので、その不思議な力を私以外に見せてはいけない、と堅く命じ、自身も一切人に話しませんでした。

そんなある日、この国の王様と大臣たちが議会の一室でこんな相談をしていました。

「まことか！？ やはり最近魔物が出没するようになったのも……」
「はい。封じ込められていたはずの大魔王ルシフェルが復活したら

しいのです。現に、封印の小島であるパピラス島近辺で漁をしていた者たちが、禍々しい異形の姿を見た、と証言しているのです」

王様は眉をひそめて思索しました。早く誰かに退治に行かせないと大変なことになる。

「王宮の兵士の中から討伐隊を結成してすぐに退治に向かえ」

「わかりました」

そして、1000人ほどの討伐隊は長い旅をして、大魔王の封印されているパピラス島へ辿り着きました。その辺りだけいつも薄暗く、黒い霧が立ち込めていて、視界もろくに利かないほどです。島の中央に神殿があり、そこへ向かうために長い石階段を昇らねばならぬのですが、中途まで進んだところで、凄まじい大きさの大蛇が襲ってきました。「グギヤア」「ゲエエア」瞬く間に討伐隊は全滅してしまいました。

何度討伐隊を編成しても、誰一人帰ってこない。追い込まれた王様は、ある日城下町にこういう立て札を立てました。

求む！ 大魔王を倒す勇者。ほうびは思いのまま。世界を救ってくれい！

その立て札を見ても、みな怖気に震えて立ち去るのみでしたが、一人の重厚な鎧に身を包んだ武者はそれを見ると、静かに王宮へと歩いていきました。彼の名はモントル。武者修行をし、世界を放浪していた戦士で、腕には自信があるのです。王宮にやっていくとみな手放しで喜びました。これで全部で四人来た、一緒に旅立ってはどうか、と薦められました。残りの三人は誰だ？とモントルが待合室のテーブルを見渡すと、一人は神官で、色の白い真面目そうな男でした。そして、もう一人は長く青い毛をたなびかし、金のマントに身を包み、大きな剣を背中に担いだ女性でした。なんと、女戦

士か、とモントルが感心したが、あと一人が見当たらない。

「はて、もう一人はどこだ？」

とモントルがひとりごちると、神官のクリスが微笑んで、目の前のテーブルを指差した。するとそこに小さな少女の人形が置いてある。

「なんだこりゃ？」とつまみあげようとすると、

「いやだエツチ！ 気安く触らないで！」と悲鳴が返ってきてモントルは腰を抜かしました。なんとそれはおやゆび姫でした。

「こりゃたまげた。生きてるのか。それで、お前さんも大魔王退治に行くのかね」

モントルは笑いながらいきました。もちろんそうよ、とおやゆび姫は澄まして答えました。はは、面白い冗談だ、とモントルが言ったとたん、ごうつと火の玉が飛んできて、モントルのひげが燃えましました。

「アチチッ！ これはまさか魔法か！ アーチチ」一同は爆笑です。こうして、四人は王様に薦められるまま、四人パーティーになってパピラス島へ大魔王退治に向かう事になったのでした。

「私は歩くのが遅いからここね」

言うが早いかモントルの肩におやゆび姫はおさまりました。歴戦のつわものもさっきの火炎攻撃ですっかり塩らしくなって逆らわないのでした。

城下町を出るところにハンナが待っていました。おやゆび姫になんどもキスし、別れを惜しみました。

先頭を颯爽と行くのは女戦士のレイアです。どうも風格があるな、とモントルは感じていました。クリスはやや青ざめているようです。無理ありません、討伐隊をことごとく全滅させた大魔王を退治しに行くのです。ただし、彼も「ヒール」と言う癒しの呪術を身にはつけているのですが。

「何日ぐらいでつくのかなあ」

とレイアがぼやいた瞬間、空から巨大なコウモリが襲ってきまし

た。戦闘開始です。

モントルのこうげき！ きよだいコウモリAに23のダメージ！
レイアはしんくうぎりはなつた！ きよだいコウモリAに10
1のダメージ！

きよだいコウモリBに97のダメージ！ きよだいコウモリたち
をたおした！

けいけんち16 34ゴールドをてにいれた！

モントルとクリスはあつけにとられました。この人、最初から強
すぎない？レイアはすまし顔で先を急ぎます。でも、希望が見えて
きたかもな、クリスはちよつと安心したと同時に、電光石火でレイ
アに惚れたのでした。しばらく歩くと、今度は大きな猛牛が二匹走
ってきました。

クリスのこうげき！ あばれとうぎゅうAに14のダメージ！

あばれとうぎゅうはとっしんしてきた！ モントルに9のダメー
ジ！

レイアはさみだれけんをはなつた！ あばれとうぎゅうAに11
9のダメージ！

あばれとうぎゅうBに123のダメージ！ あばれとうぎゅうた
ちをたおした！

けいけんち20 42ゴールドをてにいれた！

こんな調子で、モントルとクリスの成長の余地もなく、ひたすら
魔物はレイアがなぎ倒し、旅はどんどんと進んでいくのでした。

とある渓谷に辿り着いた時、その門番と対峙することになりま
した。橋の前にいるので倒さない限り進めません。

「どうしても通してくれないんだね」

「通りたければ腕づくで通りな」そして戦闘がはじまりましたが、

大変な事態が起きました。

はしのもんばんは　フィメールのほらがいをふいた！　なんとレ
イアがねむってしまった！

なんと　おやゆびひめがねむってしまった！

女性のみを眠りに誘うアイテムを持っていたのです。となると、
残った二人でなんとかしなければいけません。

モントルのこうげき！　はしのもんばんに7のダメージ！
クリスのこうげき！　はしのもんばんに5のダメージ！
はしのもんばんはギラをとなえた！　モントルに15のダメージ！
クリスに14のダメージ！　クリスはホイミをとなえた！
モントルのHPが15かいふくした！

消耗戦の果てに、二人はなんとか橋の門番を倒しましたが、疲労
こんばい、あやうくMP切れになるところでした。今後は精進しよ
う、と二人は誓ったのでした。そして、戦闘になるとレイアには身
を守ってもらい、自分達で攻撃して倒すのでした。また、おやゆび
姫もしばしば攻撃魔法で援護しました。体は小さいくせに、おやゆ
び姫のMPは最初から500もあり、イオナズンなど強力魔法も使
えたり、ある意味やりたい放題なのでした。

そうして長い旅を続け、いよいよ一行は小船でパピラス島に辿り
着きました。大魔王側も馬鹿ではないらしく、見張りを置いていた
ようで、上陸するなりボス級の魔物が一斉に襲ってきました。

じごくのだいじゃがあらわれた！　サタンベИБスがあらわれた！
ギガゴーゴンがあらわれた！　マサクールマシンがあらわれた！

レイアはギガスラッシュを放ち、おやゆび姫はイオナズンを唱え、モントルは岩石を落とし、クリスはグランドクロスを放ちました。もうどうせ最終ボスは近いんだから、と特技の大判振る舞いであったという間に倒し、いよいよ大魔王の居城に乗り込みます。と、いきなり落とし穴がありました。一同真つ逆さまに……と思ったら、おやゆび姫の念力でなんとか助かりました。さらに進むと、行き止まりです。レイアの剣撃でも壁にひび一つ入りません。

「あ、ここに隙間がある。入ってみるね」

本当に親指の先ぐらいの細い隙間に、おやゆび姫は入り込んで、向こう側に這い出ました。すると、そこは大魔王ルシフェルの広間でした。

「ちょ、ちょっと待ってね、ひ、ひとりはさすがに辛いから」

と、おやゆび姫がこちらからなんとか壁を壊そうとしていると、大魔王ルシフェルは

「よくきた勇者ども。わしはお前達を待っておった。醜い人間どもを滅ぼし、世界を我が物にするのを……」

と、準備していたらしい台詞を淀みなく言っています。残念ながら、ことにまず来たのはおやゆび姫ひとりでした。

おやゆび姫がなんとか壁を壊して、残りの三人を無事呼び寄せた時、ルシフェルの長口舌も終わりを告げ、いよいよ最終決戦が始まりました。

ルシフェルはしゃくねつのほのおをはきだした！ レイアに127のダメージ！

モントルに141のダメージ！ クリスに103のダメージ！

おやゆびひめに67のダメージ！

おやゆびひめはハッスルダンスをおどった！ 「それ ハッスルハッスル！」

レイア、モントル、クリス、おやゆびひめのHPが80かいふく

した！

レイアはジゴスパークをはなつた！ ルシフェルに274のダメー
ー
ジ！

クリスはフバー八をとなえた！ クリスらをやさしいひかりのこ
るもがつつみこんだ！

ルシフェルはめいそうした…… ルシフェルのきずがかいふくし
た！

このように戦いは果てしなく続きました。どれだけ攻撃しても、
ルシフェルはすぐに瞑想して傷を回復してしまいます。

明らかにレイアらの体力も気力もMPも尽きつつあります。その
うち、なんとレイアの剣が折れてしまいました。これまでか……。
おやゆび姫はそれを見て決心しました。突如、自らの体に炎を燃や
し、体ごとルシフェルに体当たりし、

「メガンテ！」

と自爆の呪文を唱えました。大爆発が起こり、大魔王の居城ごと
吹き飛ばすほどの火柱が上がりました。三人は吹っ飛び、島の果て
まで転がりましたが、それぞれの命は無事でした。

「おやゆびヒメエエーッ」

と、モントルは叫びました。なんとということだ。年端もいかぬ少
女が自爆するなんて……。うっうつと涙を流すモントルを横に、レ
イアとクリスは何か相談しています。

「もうせかいじゆのしづく持ってないよね」

「祈りの指輪も砕けてるから……ま、宿屋に泊まれば済む話だけど
それより、ルシフェル本当に死んだかな」

「たぶん大丈夫。禍々しい気は一切感じないもの」

モントルは怒り心頭です。ぬおつと立ち上がり、二人に詰め寄り
ます。

「おいお前ら、そんなに冷たい奴だったのか！ おやゆび姫は自分
の命までかけて世界を救ったつてのによお！」

ふたりはきよとんしています。そして、レイアがおもむろに言いました。

「あなた、ザオリク知らないの？ 二回ぐらい死んだ分際でさ」

「いや、ザオリクはもちろん知ってるけど……え？ 物語の重要な場面で死んだキャラには効かないんじゃないの？」

「お前は何を言っているんだ」

「誰だろうが蘇生呪文は効くのが当然でしょ？ オルテガとかパパスが生き返らないのは物語を盛り上げるために決まってるじゃないん」

「と言っ事は？」

「そういうこと。さ、早くどこかの町に戻りましょ。世界は平和になっただから」

三人は小船でパピラス島を離れ、最寄の町の宿屋に泊まり、一泊したのち、クリスのザオリクでおやゆび姫を生き返らせました。

「あの魔王の戦法最低じゃん。ひたすら回復、回復って、馬鹿じゃないかしら」

蘇生するなりのおやゆび姫の第一声がこれだったので、三人は大笑いして、さあ凱旋だ、故郷に帰ろう、と出発したのでした。（終わり）

あとがき

この物語は、随所に「ドラゴンクエスト」固有の用語が出てきます。ドラクエをやったことのない人には（特に若い女性は知らないのでは）全く面白くなかったであろう事を深くお詫び申し上げます

^^：

あとがき

さて、例のごとく作者の気の向くままに書いてきたこの「世界の童話」シリーズもここで一旦終わりにして、解説ついでにあとがきを書いておこうと思います。その前に、全体的な総括で言うと、やっぱり受け継がれて世界中で知られている童話って、ほのぼのすると言つか、ハッピーエンドが多いんですけど、同じくらい悲劇性も高かったりするんですね。作者はバッドエンド嫌いなので、どの作品も必ずハッピーエンドになるように仕向けました。（金の斧と銀の斧は微妙ですがw）後、著名な童話の大半がグリム童話とアンデルセン童話なので、調べてみて驚きました。

まず一話めの星の銀貨ですが、日本では「星の”金”貨」としてよく知られていると思います。なぜなら、同名のトレندیドラマがあつて、かなり人気があつたからです。その主演女優の酒井法子さんはあんな事になってしまいました。原作では少女が裸になつたあと、すぐに銀貨が降ってきますが、それでは面白くないので、神様であるキリストご本人に登場いただき、少しだけ面白くしました。どちらも新約聖書にそのまま出てくる言葉でありエピソードです。

次に、小人と靴屋さんですが、これも原作のままではただ心温まる物語に過ぎないので、もう少し小人たちに活躍してもらいました。もし筆者なら腹黒く「次は x 家へ行って来い」と命ずるかもしれませんw

次のみにくいアヒルの子は、この年で読んでもなかなか含蓄があると言つか、一筋縄ではいかない物語です。原作も読みましたが、解説で「このみにくいアヒルと言うのは作者のアンデルセンなのだ」

ですとか、わかるようなわからないような事が書かれてあり困りました。まあとりあえずなるべく原作に沿って、最後に一暴れしてもらった、と言う感じですねw 白鳥の歌は作者のオリジナルですが、最後の「神は天にいまし」はブラウニングと言うイギリスの詩人の一節です。

次の人魚姫は、これ、最後悲劇なんですね。幼少の記憶と言うのは本当に曖昧で、最後王子と結婚するもんだと思ってましたね。それに、人間になった姫の待遇悪すぎます。声は出ない、足の裏は歩くだけでナイフが刺すほどの痛み、それで王子との結婚に失敗したら泡の藻屑とか、いくらなんでも……と思いませんか？まあ、魔女と契約なんかしたらこうなるぞ、と言う意味も込めてあるんでしょうか、アンデルセンと言う童話作家はなかなか捻くれた人のようです。とりあえず王子とは結婚できないものの、姫の命はお姉さん人魚に守らせました。

次の金の斧と銀の斧は、人間を落としたり面白くなるんじゃないか、と言う発想で書いてみました。増えた人間どうしようか、考えましたが、まあ溶け込むと言う事でw あの池があれば少子高齢化も怖くありません。片端から子供を落とせばいいのですからw

次のマツチ売りの少女もバッドエンドなんで、発想を大きく変えて、少女の更生小説にしました。案外いい作品になったんじゃないか、と自負しています。全体的にお涙頂戴的な作品になってしまったのは、作者が童話の持つ良識に感化されたのでしょうかね。

次のシンデレラは、フランス革命にひっかけて、市政者の心構えについての作品にしてみました。原作もへったくれもそんなの関係ねえ（古い）。

ちなみに「パンが無ければケーキを食べればいいじゃない」と言

ったのは実際にギロチン処刑された王妃マリー・アントワネットと
言われていますが、どうも後世の捏造のようです。ただし、当時の
フランス王朝は多かれ少なかれその類の人物が多く、それでフラン
ス革命が起こったと言う事のようにです。

さて、最後のおやゆび姫ですが、原作はいまいち脈絡のない物語
で、それならいっそ、と言う事で無茶苦茶にしてやりました。日本
全国のおやゆび姫ファンのみなさん、すみませんでした。

もっと細かく書けばそれなりに面白いかもしれませんが、一話の
長さが余り長いのも問題なので、あの程度にしました。どうも作者
はDQ好きであります。分からない人には本当にすみません。

以上八話で、とりあえず終わりにしようと思います。日本昔話の
ほうがいじりやすかったのはなんでかなあ……と考え込んでしま
います。作者名が分かっているもののほうがやりにくいのかも知れませ
ん。日本の昔話は大概不詳ですので。もしどうしても書きたい作品
が出てくれば、また書こうと思います。それでは、また別の作品で
お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786i/>

本当はもっと面白く恐ろしい世界の童話

2010年11月12日16時25分発行